

世界で活躍する若者

吉本 麻都佳 谷上 清香 又江原 早紀

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

スポーツの祭典オリンピックと戦争には深い繋がりがあることはよく知られてことである。それは悲しい歴史と同時に戦争のない平和への願い、すなわち、戦場での戦いから生まれる「悲劇」ではなく、競技場での戦いから生まれる「感動」を世界中の人々が求めているに他ならない。現代の日本の若者の殆どは戦争を知らない世代であるが、世界では数多くの戦争が起り、その歴史を繰り返していることは事実である。それゆえ、多くの人々は平和を求めるようにスポーツを求め、やがてスポーツは私達の生活に深く根付いたのである。

このように多くの人々に親しまれているスポーツに目を向けると、近年急速にスポーツ界の幅広い年齢層の活躍が世間を賑わせている。そして、その中でも一際注目を集めているのが若者の活躍であり、私達はその活躍を誇らしく、希望溢れるものとして認識しているのではないだろうか。しかしながら、若者達が活躍している舞台は一見すると華々しく思えるが、活躍を伝える報道と同時に不祥事を伝える報道を数多く耳にすることも事実であり、若者の活躍の裏に表面化していない問題がどれ程存在して、また、彼らの活躍は社会にどのような影響をもたらしているのであろうか。そこで、本研究では若者の活躍が近年急速に注目されている背景、および、活躍する若者を取り巻く環境について、シニア世代の活躍も含めた様々な視点から詳しく述べていくことにする。

1 章 若き天才達と輝き続けるシニア達

近年、若者たちの活躍がメディア等で注目されている。その要因は世界的な不景気により、世間に閉塞感が広がる中、若者達の活躍が国民に希望を与えているからではないであろうか。勿論、その一方で第一線で活躍し続けるシニア達の存在も忘れてはならない。では、若者やシニアのどのような活躍が人々を惹きつけているのであろうか。そこで、この章では若者たちが注目を浴びている背景と共に、輝き続けるシニア達について詳しく述べていく。

1.1 節 若き天才達

近年、最年少記録が次々と塗り変えられ、十代から二十代前半の若者が脚光を浴びている。昨年の12月にはプロゴルファーの石川遼が18歳で賞金王に輝いた。これは尾崎将司が1973年に26歳で達成した最年少賞金王記録を大幅に更新したものであり、彼は18歳にして日本を代表するプロゴルファーとなった。また、2009年のバンクーバーオリンピックではフィギュアスケートの浅田真央が19歳で銀メダルを獲得したこと等も記憶に新しいことである。尚、フィギュアスケートにおいて1つの競技会中に3度の3回転アクセルを成功させたのは女子シングル史上初である。この快挙はギネス世界記録にも認定されている。

アマチュア選手では早稲田大学野球部に所属する斎藤祐樹もスポーツ界を盛り上げている若者の一人である。2006年、彼は早稲田実業学校高等部3年生の夏に出場した高校野球甲子園大会の優勝投手であり、この決勝戦はNHKで視聴率29.1%、決勝再試合も平日の日中にも関わらず23.8%と高視聴率を記録した。また、試合中にマウンド上で折り畳んだハンカチで汗を拭く仕草から「ハンカチ王子」という愛称で親しまれた。

このような若者の勢いはスポーツ界だけに留まらずその他の分野にも及んでいる。例えば、文

学界では当時 19 歳の綿矢りさが早稲田大学在学中に「蹴りたい背中」で第 130 回芥川賞を 2004 年に受賞した。これはそれまでの最年少記録を大幅に更新したものであり、芥川賞受賞作の単行本としては 28 年ぶりのミリオンセラーとなった。また、音楽界ではピアニストの辻井伸行がアメリカで 2009 年に開催されたヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて日本人初の優勝を飾った。彼は盲目でありながら数々のコンサートやリサイタル、コンクールに参加し成功を収めている。その他にも、芸能界の若者といえばジャニーズ Jr. である。彼らはジャニーズ事務所 に所属するタレントグループであり、ここからデビューした SMAP や嵐は幅広い年齢層の男女から支持され、歌手や俳優、司会者として活躍している。このようにスポーツ界だけでなく文学、音楽、芸能と様々な分野において若者の活躍が注目を集めており、彼らが現代社会を盛り上げていると言っても過言ではない。

1.2 節 なぜ若者たちは注目されるのか

才能ある若者が注目される理由は実力に限られている訳ではない。例えば、「ハニカミ王子」という呼び名で親しまれているゴルフの石川遼は、18 歳とは思えないその謙虚な態度や姿勢が世間の人々の注目を集めた理由の 1 つであり、また、ハニカミ王子と同時期に注目を集めた「ハンカチ王子」こと野球の斎藤佑樹は、田中将大というライバルの存在が一層斎藤の存在を引き立てた。加えて、2006 年の甲子園大会決勝戦で死闘を演じた二人が大学進学とプロ野球進出というそれぞれの道を歩み出したことも彼らがいまだに注目を浴び、野球界を盛り上げている理由である。ライバルと言え、フィギュアスケートの浅田真央とキム・ヨナの二人も思い出される。フィギュアスケート界に突如現れた二つの新星に世間の注目は集まり、オリンピックや世界選手権では若い二人の凌ぎ合いが世間を騒がせた。この他にも若者が活躍する場はスポーツ界だけに留まらない。例えば、文化の分野にも目を向けると、文学では最年少タイ記録で文藝賞を受賞した綿矢りさが注目を集めている。これは、若者が活字離れや文字離れを起こしていると言われている中での受賞であったことも注目を集めた理由の 1 つである。また、音楽の分野では、ピアニストの辻井伸行が注目を浴びている。全盲という視覚障害を持ちながら、年齢・国籍・障害等の要素が一切評価に含まれないコンクールでの優勝という確かな実力が世間を騒がせた。

以上ように、活躍する若者が注目を集めているのにはそれぞれに理由がある。そして、そもそも人々が若者に注目する理由は、近年、不景気等で若物の活気がないと言われている中、若者たちの活躍が世間に希望や勇気を与えていることにある。よって、少子化が益々顕著となるこれからの時代において、若者の活躍は更に重要になってくるのである。

1.3 節 シニアだって負けてない

若者が脚光を浴びる中、年配でも現役として活躍する人は少なくない。スポーツ界で最年少記録が次々と塗り替えられていく中、プロゴルファーである青木功は 67 歳にして現役であり、全米オープンでは準優勝を果たしている。日本ゴルフツアーでは通算 51 勝を果たして歴代 2 位を獲得する等、日本を代表する名ゴルファーの一人であり、日本プロゴルファー永久シード保持者である。同じスポーツとして、サッカー界では三浦知良が 43 歳にして日本の現役最年長選手であり、J リーグ年間最優秀選手賞など多数の賞を受賞している。40 歳を迎えてもその意識付けは全く揺らぐことがなく、彼の存在そのものが同じピッチでプレーする若い選手達の生きた手本となっている。一方、芸能界に目を向けると、「永ちゃん」「ボス」との愛称で国民から親しまれる矢沢永吉は 60 歳にしてロックミュージシャンとして活躍している。2010 年現在でも多くの人から支持を得ており、留まることを知らない現役最強のロックンローラーである。

様々な分野で活躍するシニアがいる中で、何と言っても 90 歳で活躍し続けている森光子を忘れることはできない。森光子が主役を演じる舞台「放浪記」は 1961 年から 45 年間という長きに渡

って続いており、これは舞台公演回数として日本記録となっている。また、2009年5月9日の自身の誕生日には上演2000回を達成して、通算2017回の公演を成し遂げ、女優初の最高齢で史上17人目となる国民栄誉賞を授与された。他にも紫綬褒章、勲三等瑞宝章、文化勲章等を授章している。舞台ではでんぐり返しを行っており、これは日頃からスクワットやエアロバイクで肉体の鍛錬を積み、食事や健康に気を使ってきたからであろう。最近では体のことを考えて万歳三唱に変わっているが、80歳を過ぎるまで体を鍛えることは常識では考えられないことである。

このように、若者が活躍する中でシニアがここまで活躍するにはそれぞれ日頃の努力していることが結果となり現れていることだろう。言うまでもなく、この様なシニア達のそれぞれの千秋楽は予想できるものではない。

2 章 日本の変化

戦後から現在にかけ、時代の変化と共に教育や食生活が変化しているが、それに伴い日本人の体格も著しい変化を遂げている。そして、近年ではゆとり教育の実施を契機として、様々な分野において早期教育産業が参入している現状となっている。このような体格の変化やエリート教育としての早期教育が現在活躍している若者達にどのように結び付いているのであろうか。そこで、この章では教育制度と食生活を背景として、昨今の若者の活躍に至るまでの日本の変化やその影響について詳しく述べていく。

2.1 節 若者の活躍とエリート教育

日本では1980年から「ゆとり教育」が実施され、2002年には完全学校週5日制が取り入れられた。しかし、生徒の学力が低下しているという指摘を背景として、2008年には学習内容を増加させた新学習指導案が告示され、「脱ゆとり教育」と称されている。これに伴い世間では幼児期から一般よりも年齢を繰り上げて文字や数、外国語、音楽、スポーツなどの教育を開始する早期教育または、エリート教育が注目され、民間企業が戦略として早期教育産業に参入するようになった。このような社会背景の中で幼少時代を過ごしたのが現在の十代から二十代の若者である。例えば卓球選手の福原愛は3歳から卓球を始めて、練習時間は毎日4から5時間、コーチは中国人を住み込みで契約するなど、彼女の両親は徹底的にエリート教育を施している。また、エリート教育は家庭に限らず、芸能人を目指す幼児から青少年にボーカル、ダンス、演技の指導をするアフターズクールも全国で開校されている。そこから安室奈美恵やSPEEDなどの有名芸能人が世に送り出されている。

幼い頃から一心にやってきた英才教育の結果、その道で生計を立てるまでに成功している若い世代の姿はメディア等で大きく取り上げられる。その活躍ぶりを見て、子どもたちが憧れを持ったり、親が自分の子どもにも才能があると疑わず同じような教育を受けさせようとする為、エリート教育を受ける子どもが増えている。例えば、石川遼が15歳9カ月で日本男子ツアー史上最年少優勝を飾り、史上最年少の16歳3カ月でプロに転向した事が世間を騒がせた後はゴルフのジュニア大会が活気溢れるものとなった。

このように、教育制度の改革やメディアの影響から様々な分野でのエリート教育への関心は高まり続け、これから活躍する若いアスリートと強く結び付いているのである。

2.2 節 食と体格の変化

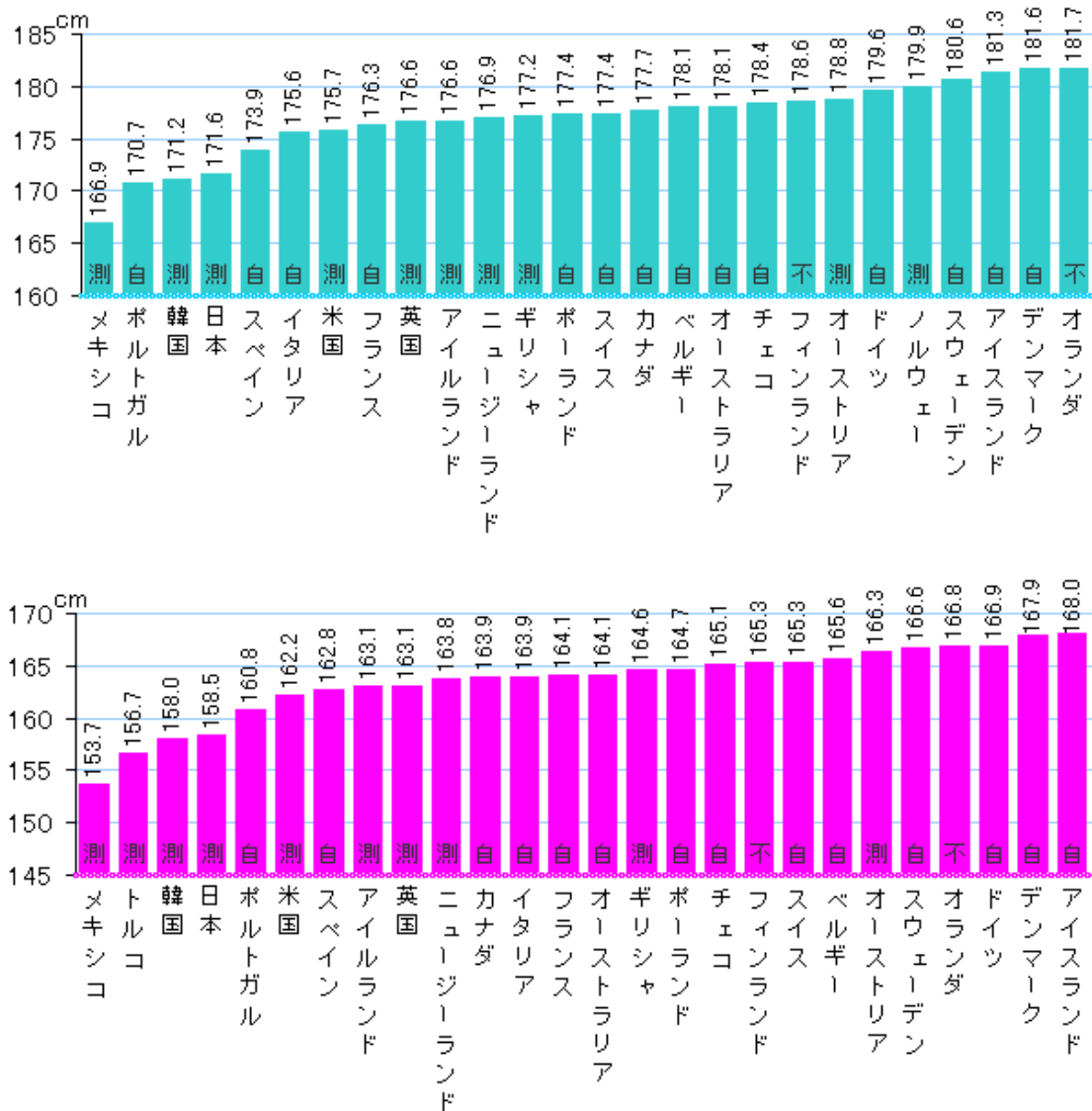
洋風化に伴い、肉類や乳製品等の動物性たんぱく質を多く摂るようになる等、戦後日本の食生活は大きく変化した。人間が活動する為のエネルギー補給源となるのは、脂肪、糖質、炭水化物

の3つであるが、戦前と現代の給食を比べてみると、戦前はパンと脱脂粉乳が主であったが、それが昭和40年代になると麺類やご飯が週に1, 2回入るようになり、また、脱脂粉乳も牛乳を混入した混合乳に変わり、昭和45年には現在と同じ牛乳と変化した。そして現在では主食の中心がご飯となり、加えて栄養バランスの取れた給食となっている。このような食の変化に伴い、子ども達の体型も変化しており、50年前と比べると男子では身長9 cm・体重10 kg、女子では身長5.4 cm・体重4 kg、体型が大きくなっている。しかし、現代の女子の平均体重は減ってきている傾向があり、これはダイエットを意識していることが原因であると考えられている。過度なダイエットは摂食障害やうつ傾向等、起こしやすく、出産時に低出生体重児になる確率が高くなることが知られており、成長途中の子ども達の健康が懸念されている。

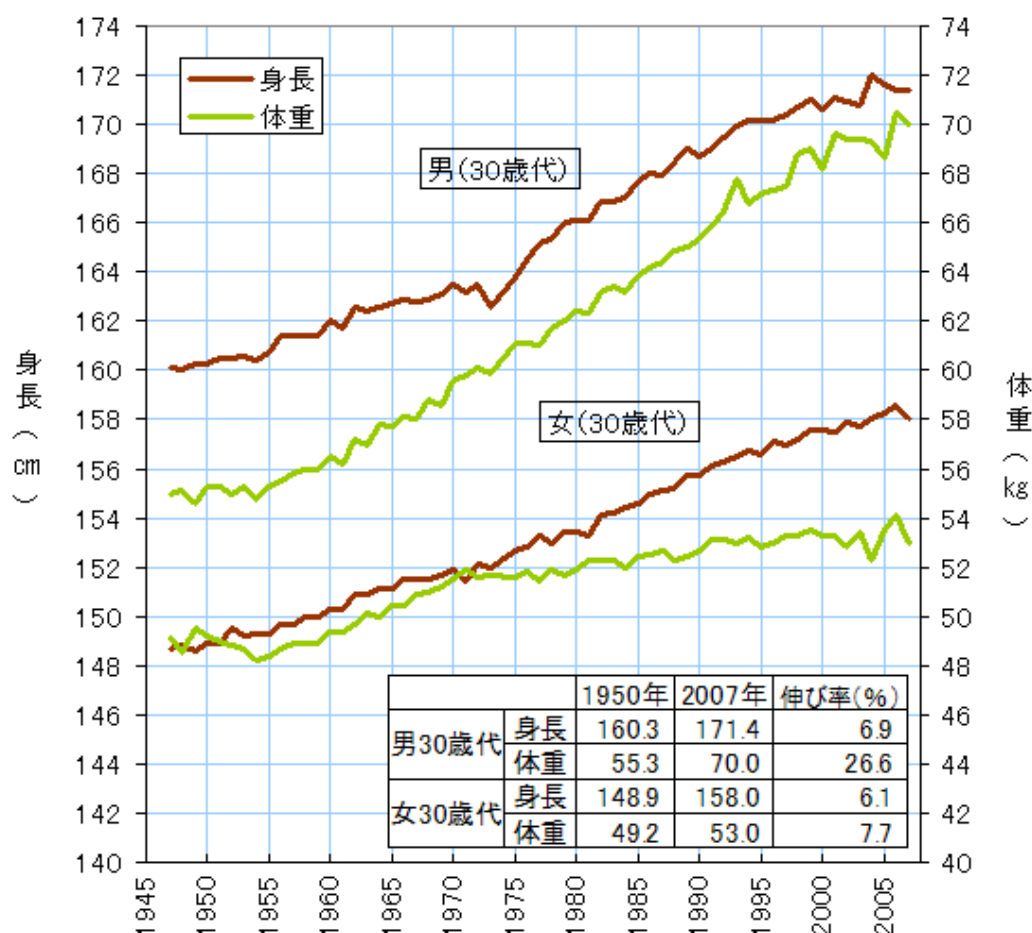
以下は20代男子(上)と20代女子(下)の国際比較した平均身長、日本人の平均身長・平均体重の推移の図表である。

平均身長の国際比較

*調査法: 自(自計申告)、測(測定結果)、不(方式不明)



日本人の平均身長・平均体重の推移



(注) 成人男女の代表として30歳代を取り上げた。

(資料) 国民健康・栄養調査(厚生労働省、1974年調査なし)

これらの表図からわかるように、日本人の体型は戦後から大きく変化しており、この体型の変化が近年活躍する若者が世界に通用するようになったことに大きく影響していると考えられる。また、右肩上がりのグラフから分かるように、今後、日本人の身長体重は変化し続け、より大きな活躍を期待できるであろう。

3章 スポーツ界、芸能界が抱える問題点

若者の華々しい活躍が注目を集める中、日本のアスリートの世界は選手強化費が他国と比べて極めて少ない事や選手生命が短い事、引退後のサポートや保証がない事等、様々な問題を抱えている。また、多くの若者が夢見る芸能界においても、犯罪に関与する事件が後を絶たない状況となっている。そこで、この章では1章で述べた若者の活躍、2章で述べたその社会的影響を踏まえて、世界の舞台であるオリンピックにおける問題点や若くして活躍し注目されることの問題点について述べていくことにする。

3.1 節 オリンピックのマイナス面

世界各国のアスリートにとって夢の舞台とも言えるのがオリンピックであり、日本でもその活躍が社会に活気を与えているが、一方で日本のオリンピック事情はアスリートにとって大変厳しいものとなっているのも事実である。最も大きな問題として挙げられるのが選手強化費である。バンクーバーオリンピックが開催された2010年の選手強化費は日本が27億円であるのに対して、アメリカが165億円、ドイツが274億円、カナダが100億円、韓国が106億円となっており、その差は一目瞭然である。また、メダル獲得数を比べてみると日本が5個であるのに対して、アメリカが37個、ドイツが30個、カナダが26個、韓国が14個となっており、ここでも日本のメダルの少なさが目立っている。このように選手強化費とメダル獲得数には比例関係があるが、その他にもトレーニング施設を有している国が多くメダルを獲得している等、日本が世界から後れを取っているのが現状である。このことから、日本のオリンピック選手に対する支援は不十分であり、これからアスリートが万全の態勢でオリンピックに挑み続ける事が出来るとは言えない状況なのである。では、日本がオリンピックで世界に劣っている理由は強化費の問題だけであろうか。例えばあるスポーツに多くの国民が関心を持っていれば、その国においてそのスポーツの競技人口は増え、結果としてその競技レベルは上がることは容易に想像できる。すなわち、オリンピックでの活躍はその国のスポーツに対する国民性に比例するはずである。そこで、日本国内におけるスポーツの現状について考察していくことにする。

日本でプロスポーツとして挙げることができるのは野球、サッカー、相撲の3つ程度であり、その他はプロスポーツとして確立しているとは言えない現状である。このようなプロ化の遅れは世界的な競技レベルの向上に迫いついていかない危機を招き、サッカーですらプロ化してようやく世界のレベルが見えてきた状況であり、その他の競技については相対的なレベルの低下は避けられないというのが現状である。よって、スポーツ界にとって競技レベルを維持する為にはプロ化が絶対条件であると言えるのではないであろうか。このように、多くのスポーツにおいてプロ化が進んでいない理由としては、競技レベルの低さや環境整備が整っていないこと等が挙げられる。例えば、アイスホッケーでは本拠地がなく、リンクの数が限られており、加盟チームが関東と北海道にしかないという現状であり、これが致命的な欠点となっている。

3.2 節 引退後の進路

テレビ等のメディアを通して見るとアスリートの世界は一見華やかに見えるが、若いアスリートの活躍には引退後のセカンドキャリアという大きな問題が存在している。例えば、代表的なサッカー・野球・女子バレーボール・相撲に注目して引退選手の進路を見てみると、サッカーでは発表されている131人の引退選手の内、79人が下部リーグ移籍、16人がJクラブスタッフ、7人がサッカー関連企業、5人が一般企業、9人が進学・就学、15人が未定となっている。また、プロ野球では発表されている80人の引退選手の内、32人がコーチや職員等の球団スタッフ、21人が独立リーグや社会人野球等の選手、5人が解説者等、15人が一般企業・経営者、3人が就学、4人が未定・不明となっている。一方、女子バレーでは殆どの選手は嘱託・契約社員として会社に所属しており、通常の社員とは異なりバレーボールが仕事となっている。その為、選手の多くは1年毎の契約であり、引退後の補償も無い状況となっている。更に、相撲では引退平均年齢は約31歳であり、実力者は引退後に親方として相撲界に残ることができるが、それ以外の力士は第二の人生を模索することとなる。中には、力士時代の「ちゃんこ」の知識を活かして料理屋の事業展開をする者もいるが、それは一部に過ぎない現状である。

このように、引退後の進路は確実な補償がある訳ではなく、路頭に迷う者も少なくない。よって、現役アスリートや未来のアスリートを夢見る世代の為、各協会等がセカンドキャリア支援を積極的に強化していくことが求められているのである。

3.3 節 芸能界と犯罪

芸能界と犯罪は深い関わりがある。最近ではどのメディアでも歌舞伎俳優・市川海老蔵の傷害事件が取り上げられている。この事件は飲食店で市川海老蔵が数人のグループとトラブルになり殴られたとみられ、現在、傷害事件として捜査中となっている。本人は事件当日の記者会見を体調不良を理由にキャンセルしたにも拘らず、前日の夜から飲みに出ていたことが発覚した。その他にも出演予定だった幾つかの舞台を降板したことから、「日ごろのおごりが招いた事」だと謝罪している。また、有名人が犯罪に関与するケースで衝撃的な事件と言えば、2009年に元俳優・歌手の押尾学がホステスと合成麻薬メチレンジオキシメタンフェタミン（MDMA）を服用してホステスが死亡した事件が発覚して、MDMA服用の容疑で逮捕された薬物事件である。裁判の結果、懲役2年6カ月の実刑判決を受けたが、即日控訴して保釈保証金1000万円を納付し保釈されている。

このように、芸能人が関与する暴力事件や薬物事件は決して珍しい物ではない。しかし、共通点は若くして芸能界や歌舞伎界といった特定の世界で活躍しているという事である。これにより、一般に常識と言われる発言や行動が未熟であったり、若い頃から大金を手に入れたり、ストレスが溜まりやすい環境であったり、薬物が手に入りやすい環境である等、芸能人を取り巻く環境は犯罪に関与しやすい物だと言えるのである。このように、若者の活躍が際立つ一方でこのような問題点が存在する事も忘れてはならない事実なのである。

まとめ

これまで述べてきたように、世間では不景気等により閉塞感が広がる今日にも拘らず、戦後の食の変化による体格の変化やゆとり教育による練習時間の増加等、食や教育制度の変化に伴って、近年、若者達は大きく輝き、その活躍が国民に感動や希望を与えている。しかし、その一方で現在の日本のスポーツ界には若者が十分に実力を発揮できていない現状や若くから名誉を手にする事で犯罪に巻き込まれやすい環境等、影の部分が存在することも事実である。これらの状況を鑑みる時、多くの若者が憧れるスポーツ界等の華やかな世界の実情を社会全体としてどのように考えていかねばならないのだろうか。具体的な議論として、スポーツ界に目向けると最高峰である「プロの世界」では「観客」を魅了する「パフォーマンス」が求められ、過度な音楽や応援等、人々は日頃のストレスを発散させるかの如く観客として「熱狂」して楽しんでいる。勿論、それがプロの世界に求められていることであるが、常識離れした年俸や大金への誘惑を起因とした禁止薬物の使用や賭博等の様々な問題が起きていることも事実である。しかしながら、これは選手だけの責任ではなく、社会全体が作り上げた結果であることを忘れてはならない。また、このような問題はスポーツ界だけではなく、若者が憧れる世界に共通するものではないだろうか。

多くの若者がプロフェッショナルの姿に憧れ、それを目標に努力している。そして、その純粋で直向きな努力は見返りを求めるものではなく、ゆえに、多くの人々は「感動」するのである。従って、このような将来の活躍を夢見る若者をこれからも絶やすことなく生み出していく為にも、社会のスポーツ界等の若者が憧れる世界に対する考え方そのものを考え直すことが重要なのではないだろうか。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思いますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治